

道外研修 東北コース(3・4日目)

報告者: 1年A・F組 東北コース研修者一同

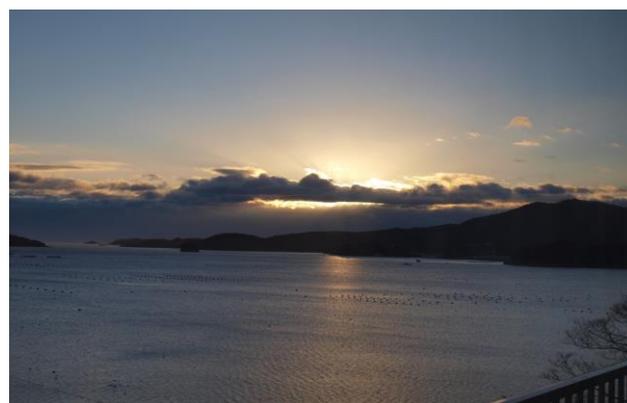
～伊藤俊さんによる震災体験講和(3日目)～

3日目の夜に南三陸ホテル観洋の営業企画係の伊藤俊さんが震災の記憶を僕たちに話してくれた。南三陸町は宮城県北東部、沿岸の町で水産業(リアスによる穏やかな海での養殖)、観光業が盛んな町で人口約17,500人、世帯数約5,400世帯でとてもきれいな景色が見られる町だったが、震災はその町を一瞬にして灰色に変えた。



震災はすべてを奪っていきその後の生活が本当に大変だったことを話してくれた。自分が生きること、子供を生かすことに必死で食料配給の人に「早くよこせ」とひどい言い方をしてしまったと話されていて、震災は町の物だけでなく人の心も壊すのだなと思った。そんな中でも“人との出会い”、“情報の大切さ”など得るものもあったと言っていた。

南三陸の町からは、とてもきれいな日の出を見ることができる。日の出を見ると、いつもは「今日も一日頑張ろう！」みたいなことを思うが、震災後の3月12日に日の出を見たときは『生きなきゃな』、『自分たちは自然の中で“生きてる”んじゃないで“生かされている”んだ』ということを考えるようになった、と言っていた。震災が良いということでは決してないが、人の心、考え方を良い方向に変えるものだと思う。



～語り部バス(4日目)～

前日に話してもらった南三陸の町に行った。今も急速にかさ上げ工事が行われていて、ニュースでよく目にする防災庁舎の周りの風景もテレビで見るとは別物だった。



現在、日本では東京オリンピックの会場を作るのに何億のお金をつぎ込み完成予定2～3年と急ピッチで進んでいるが被災地は5年たった今でも仮設住宅での生活を強いられている。その現実を受けて伊藤さんは「何が優先されるべきかを考えてほしい。震災を通して人のいいところも悪いところも見えてくる」と言っていた。

何も知らずにかさ上げされた町を見ても以前そこに町があったとはわからないだろう。しかし、それはとても悲しいことで、震災で亡くなった人もその場所にあった家も、その場所での思い出もすべてなかったことと同じになってしまう。それが怖いから、多くの人に知ってもらうために語り部バスを運行していると伊藤さんは言っていた。僕らは実際に震災を体験しているわけではないが、今回学んだことを後の震災で亡くなってしまう人が一人でも減ることを信じて伝えようと思った。

～大川小学校～

この小学校は、北上川の沿岸にある小学校だ。震災時、海からある程度離れているため、また小学校の裏山は坂の角度が急であることから、少し高いところにある北上川にかかる橋に避難したが想像を超える津波が来て、裏山に逃げた少数の教職員生徒以外は津波に巻き込まれてしまった。それについて思ったことは、やはり津波の際には、川や海からできるだけ離れること、高台、山に逃げることが大切だと改めて思った。今回の津波は、とても高く学校の屋上にいてもまかれてしまうほどだったという。避難に成功している学校もあるので、その学校を例にして、もう今回のようなことは繰り返してほしくないと思った。

